

# 日本語の反復形式「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の意味分析

崔 小萍

DOI: 10.18999/stul.35.05

## 1. はじめに

本研究では例文(1)のように取り立て助詞「も」が反復して使用される「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の意味について議論するものである。便宜上、本研究では NP(名詞句)に格助詞が付いたものも「NP」で示す。

- (1) a. 私は大型バイクもスポーツカーも持っている。  
b. 私はスポーツカーも大型バイクも持っている。

例文(1a)は例文(1b)のように NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>を相互に置き換えることができる。しかし、例文(2a)は「千年」と「二千年」を置き換えて例文(2b)のようにすると許容度がかなり落ちる。例文(3)も同様で、「計画」と「実施」を入れ替えると不自然な表現になる。

- (2) a. 千年も、二千年も前に、不意に戻ったような、美しく、古代的な風景！  
(清岡卓行『李杜の国で』)  
b. <sup>??</sup>私二千年も、千年も前に、不意に戻ったような、美しく、古代的な風景！  
(3) a. この時も彼のあやふやな作戦は、真の困難が何かを理解せず、すべての好機を臆病に見送る等、その計画も実行もまことに気まぐれであった。  
(ギボン(著)/朱牟田/夏雄(訳)『ローマ帝国衰亡史』)  
b. <sup>??</sup>この時も彼のあやふやな作戦は、真の困難が何かを理解せず、すべての好機を臆病に見送る等、その実行も計画もまことに気まぐれであった。

また、例文(1a)では、「大型バイク」と「スポーツカー」の他、「ヘリコプター」や「自転車」などの他の乗り物を持っている可能性がある。しかし、例文(4)では、「他人」と「自分」以外の人は想定できない。

(4) 他人にも自分にもウソをつきたくない。

以上のように NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>は置き換えられる場合もあれば、置き換えられない場合もある。また、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>は何等かのカテゴリーの一部の場合もあれば、全部の場合もある。そこで、本研究では「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の意味を見るにあたり、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>の関係と順序に着目して考察する。

## 2. 先行研究

従来、取り立て助詞「も」は大きく①「累加的な意味」と②「意外や極限の意味」の二つに分類されている。この他、「も」の周辺的な意味として、例文(5)のような「ぼかし」の意味を提示する研究も見られる。

(5) 君も<sup>1</sup>人が悪いね。

(日本語記述文法研究会 2009:139)

以下、寺村(1991)、庵他(2000)、日本語記述文法研究会(2009)、沼田(2009)、中俣(2015)の研究について概観する。

### 2.1 「も」の先行研究

寺村(1991)は「X も P」における「も」の意味を、共立的対比を表す「～もまた」の意味と、評価を表す「～さえ」に近い意味の 2 つに分けている。例文(6)は「共立的対比」の「も」で、その前提となる文脈はいくつかの可能性があり、「森さんの奥さんの他に小児科医がいる」「森さんの奥さんの他にも(小児科医以外の)医者がある」「森さん以外の奥さんも仕事を持

---

<sup>1</sup> 下線は筆者(崔)によるものである。以下同様。

っている」などが考えられる。また、例文(7)は「一+量詞+も」の用法で、「少なさ」を強調して、全部否定の意味になるとされている。

(6) 森さんの奥さんも小児科医です。

(寺村 1991:73 の例文(149))

(7) 賛成する者は一人もない。

(寺村 1991:83 の例文(192))

他に寺村(1991)では、評価や強調の「も」に関して数量語句と疑問語句を含めて10種類の用法が挙げられている。これを整理すると表1のようになる。

表1 寺村(1991)における評価や強調の「も」

用法	例文	用法	例文
(i) X[数量一般] も+P[肯定]	50 人も来た	(vi) X[疑問語句]も+P [否定]	体はどこも悪くない
(ii) X[数量一般] も+P[否定]	50 人も来なかった	(vii) X[疑問語句]も +P[肯定]	いつも奥さんとい っしょに行く
(iii) X[疑問数量] も+P[肯定]	遭難しかかった人を 何人も助けました	(viii) X[普通名詞<低い 価値>]も+P[否定]	かんたんな足し 算もできない
(iv) X[疑問数量] も+P[否定]	何年も払わなかった	(ix) X[普通名詞]も+P [肯定] (1) (=「X さえ」)	インド人もびっくり
(v) X[少ない数量 (分割不可能な 1)] も+P[否定]	賛成する者は一人 もない	(x) X[普通名詞]も+P [肯定] (2) (「詠嘆」)	夜も更けてまいり ました

(筆者(崔)が寺村(1991)の記述をまとめた)

次に庵他(2000)は、「Xも」の基本用法は並立的な用法であり、X以外に要素の存在を暗示すると指摘している。この他、「も」には「意外さ」を表す用法もあると述べている。例文(8)は、単にパーティーにインド人以外も来たとし、インド人も来たという意味の場合は並立の「も」となる。しかし、これが「パーティーにはインド人は来ないだろう」と予想される場合に使用されると「+α」の意味が生じ、意外さを表す「も」となる。このことから、「も」の並立的な用法と「意外さ」を表す用法は連続的な関係にあると指摘している。

(8) パーティーにはインド人も来た。

(庵他 2000:245 の例文(3))

次に日本語記述文法研究会(2009)は「累加」「極限」「ぼかし」の他、数量語句に付く「も」の説明もしている。「累加」を表す「も」は、例文(9)のように「文中のある要素を取り立て、同類の他のものにその要素を加えるという意味を表す(p.20)」用法である。

(9) 田中さんは弁護士だが、実は、奥さんも弁護士だ。

(日本語記述文法研究会 2009:21)

「極限」を表す「も」は、「文中の要素をとりたて、通常はその事態と結びつきそうもないその要素が、その事態と結び付くことの意外さを表す(p.103)」用法である。また、「も」が極限の意味になるためには、知識や文脈が必要である。例文(10)では、通常「累加」の「も」であると思われやすいが、田中さんがこの話について知らないということが考えにくい場合は「極限」の意味になるとされている。このように、「累加」の「も」にある条件を加えると「極限」になり、「累加」と「極限」は繋がっている。

(10) 田中さんもこの話は知らなかった。

(日本語記述文法研究会 2009:104)

一方、「ぼかし」を表す「も」は、基本的に平叙文で使用され、例文(11)のように「文中のある要素をとりたて、同類のものが他にもあるかのように表現することによって、文の意味をやわらげるものである(p.138)」という用法である。

(11) 君も人が悪いね。

(日本語記述文法研究会 2009:139)

以上の寺村(1991)、庵他(2000)、日本語記述文法研究会(2009)の指摘を受け、本研究では「も」の基本的な意味は例文(12)のような「累加」であると考えます。また、例文(13)のよう

な「極限」、例文(14)のような「ぼかし」は「累加」から派生した意味であると考えられる。例文(12)の「も」は「両親が日本に行く」という前提がある場面において、「両親に加えて私も行く」という「累加」の意味を表している。一方、例文(12)は何かの食べ物が非常に辛くて、普通の人びびるだけでなく、辛い物に強い韓国人でさえびびるという意味を表す。この場合、「普通の人びびる」という前提がある場面において、「普通の人に加えて韓国人びびる」という点では「累加」と同じである。

- (12) 両親が日本に行きます。私も日本に行きます。(累加)  
(13) この辛さには(普通の人はもちろん)韓国人もびびりだ。(極限)  
(14) 親も年をとったなあ。(ぼかし)

「累加」の場合は文中に明示されているかどうかは別にして、例文(12)の「両親が日本に行く」のように前提が明確にあるのに対し、「極限」の場合は例文(13)の「(普通の人はもちろん)」のように前提部分が背景化され、「NPも」のNPの特殊性に焦点が当たった表現になるという違いがある。「極限」も「累加」のうちある条件を満たした場合の一つであるが、このような特徴を持つため本研究では「累加」とは区別して考える。

また、例文(14)は「親が年をとった」と言うと、親の老化をストレートに述べる表現となるが、「親も年をとった」のように「も」を使うことによって、物言いをやわらげた「ぼかし」の意味を表している。「親が～」と言うと主体は「親」だけになるが、「親も～」と言うと他にも年をとった人がおり、不特定多数のうち一人ということになるため、NPの卓立性がぼかされるのである。「ぼかし」も「累加」のうちある条件を満たした場合の一つであるが、以上のような特徴を持つため本研究では「累加」とは区別して考える。

また、寺村(1991)は数量語と疑問語に付く「も」は評価や強調の意味を表すと指摘しているが、本研究ではこのような「も」も「極限」の意味があると考えられる。例文(15)は集會に100人來るとは思っていなかった場面で、予想外に100人來たという意外の気持ちを表している。また、例文(16)は集會に3人以上來ると思っていた場面で、予想外に3人に達しなかったという意外の気持ちを表している。例文(17)は集會に「Aさん來なかった」「Bさん來なかった」「Cさん來なかった」→「全て來なかった」という集會の中の極限までの繰り返しである。

- (15) 今日は集會に 100人も來た。

(16) 今日は集会に3 人も来なかった。

(17) 今日は集会に誰も来なかった。

これらはいずれの文も話し手の想定した人数の極限を越えて来たり来なかったりすることを表している点で共通している。そのため、本研究では数量語や疑問語に付く「も」は「累加」から派生された「極限」の意味を表すと考える。

## 2.2 「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の先行研究

沼田(2009)は、「NP<sub>1</sub>もNP<sub>2</sub>も」構文を「も」の重複構造<sup>2</sup>と呼び、例文(18)の「も<sub>1</sub>」は「累加」を表す「も」で、例文(19)の「も<sub>2</sub>」は「意外」を表す「も」であると指摘している。

(18) 太郎も<sub>1</sub>次郎も<sub>1</sub>親切だ。

(沼田 2009:143 の例文(51a))

(19) 食事も<sub>2</sub>睡眠も<sub>2</sub>とらずに一心に勉強している。

(沼田 2009:143 の例文(51b))

また、沼田(2009)は、「も」により取り立てられた要素の相互的な対応関係によって、「閉じられた『も』の重複構造」と「開かれた『も』の重複構造」の 2 種類に分けている。このうち、前者に出現できるのは「累加」を表す「も<sub>1</sub>」のみで、後者に出現できるのは「累加」の「も<sub>1</sub>」と「意外」の「も<sub>2</sub>」であると指摘している。例えば、例文(20)の「父」と「母」は「両親」という集合においてそれ以外の要素が存在しないため、「閉じられた『も<sub>1</sub>』の重複構造」となる。一方、例文(21)の「太郎」、「次郎」、「三郎」は「みんな」という集合において他にも要素(歌う人)が存在する可能性があるため、「開かれた『も<sub>1</sub>』の重複構造」となると捉えられる。

(20) 父も<sub>1</sub>母も<sub>1</sub>健在です。

(沼田 2009:144 の例文(56). 一部符号を削除した)

<sup>2</sup> 本研究では、「反復」は「同じものの繰り返し」で、「重複」は「形は異なるが、意味上重なる」という意味で「反復」と「重複」を使い分けている。例えば、「日々」や「～も～も」のような語と文は「反復構造」であるが、「道路」「収納」の場合、「道」と「路」はほぼ同じ意味で、「収」と「納」も意味が重なるため、「重複構造」であると考えている。よって、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文を「重複構造」ではなく、「反復構文」と呼ぶことにする。

(21) 花子が歌い出すと、太郎も<sub>1</sub>次郎も<sub>1</sub>三郎も<sub>1</sub>歌いだし、やがて皆の大合唱になった。

(沼田 2009:145 の例文(58). 一部符号を削除した)

しかし、本研究では「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文は基本的に全て開かれていると考える。例文(20)は「両親」を集合で考えれば「父」と「母」の 2 つの要素しかないが、「家族」を集合で考えれば「父」と「母」以外の兄弟や祖父母も健在であることを含んでいると考えられる。その場合、例文(20)は家族の代表として「父」と「母」を例示した表現となる。一方、例文(21)は「太郎」と「次郎」と「三郎」以外にも歌を歌ったことを表す表現であるが、「～も～も～も」の部分だけ見ると、この 3 人以外の人がいるかどうかは分からない。

また、沼田(2009)は「意外」の「も<sub>2</sub>」は「開かれた『も』」にしかならないとしているが、先の例文(19)の「食事と睡眠もとらずに一心に勉強している」は、「食事と睡眠」だけのことかもしれないし、「運動」や「入浴」などを含んでいるかもしれず、文脈によってどちらの可能性も考えられる。このことから、開かれているか閉じられているか(文面に出ていない他の要素が想定できるか否か)は文脈によるもので、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文自体は常に開かれていると考えられる。それが現実世界において他の要素が想定できない場合に、閉じられているように見えるにすぎないのである。

結局、沼田(2009)の指摘では、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文が「累加」の意味になるか、「意外」の意味になるかは取り立て助詞「も」の意味に由来するということになる。すなわち、「も」に前接する NP が当該の事態を成立させるものとして特に極端な要素でなければ「累加」の意味になり、極端な要素であれば「意外」の意味になると捉えている。沼田(2009)は例文(22)について「『意外』の『も』が重なるので、全体として強調された表現になる(p.146)」と述べている。

(22) お国のために大切な夢も<sub>2</sub>命も<sub>2</sub>捧げる。

(沼田 2009:145 の例文(59))

しかし、例文(22)は「夢」と「命」が並列的に列挙され、2 つの「も」が「累加」的な意味として捉えることもできる。

次に中俣(2015)は、「NP<sub>1</sub>もNP<sub>2</sub>も」構文を統語、意味、語用の 3 つの面から論じている。

まず統語的面については、「NP<sub>1</sub>もNP<sub>2</sub>も」構文には網羅性<sup>3</sup>があり、「も」で並列された要素が常にセットとして、漏れなく他の要素と結び付くことになる」と指摘している。例えば例文(23)では、毎日ビールとワインのいずれも飲むという意味を表すとしている。

(23) 私は毎日ビールもワインも飲む。

(中俣 2015:72 の例文(1))

次に意味的面については、「も」によって並列される要素は「『出現可能性』による並列」を表すと指摘している。ここの「出現可能性」というのは、「並列される名詞句のうち少なくとも1つが聞き手にとって出現が予測できる(p.75)」という意味である。例えば、例文(24)のように相手の知らない「私の町」を紹介する際に、相手はその町の「川」や「時計台」を想定できないと「も」が使いにくいという意味であるとしている。

(24) A: あなたの町はどんな町ですか？

B: <sup>?</sup>私の町には川も時計台もあります。

(中俣 2015:76 の例文(15))

最後に語用的面については、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文は「排他的推意」を発生させない、つまり他には何もないという推測ができないということを表すとしている。例えば、例文(25)は、名古屋と京都以外にこの列車が止まっても止まらなくても成立するため、名古屋と京都以外に止まる駅がないという推測ができないという意味である。

(25) この列車は名古屋にも京都にも止まります。

(中俣 2015:78 の例文(24))

このことは、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文は基本的に「開かれた構造」を表すことを示唆している。沼田(2009)は「閉じられた『も』の重複構造」と「開かれた『も』の重複構造」の2種類に分けているが、本稿では「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文のNPは基本的に開かれていると考える。

<sup>3</sup>中俣(2015:71)は網羅性について「a.どのような場合でも並列されたすべての要素がセットとして扱われ、述語ならびに他の要素すべてと結び付くという性質を『網羅性』と名付ける」としている。



以上で見たように、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の意味について、寺村(1991)は「関連したいくつかのもの」であること、中俣(2015)は「出現可能性による並列」ということを指摘しているが、それ以上詳しいことは論じられていない。これに対し、本研究では取り立て助詞「も」の持つ「累加」「極限」「ぼかし」の3つの意味が「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文にどのように継承されているか、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>はどのような関係性を持っているかという観点から「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の意味的特徴を議論する。

### 3. 「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の意味特徴

#### 3.1 「累加」の「も」の反復

まず「累加」の「も」が反復して使用する可能性について見る。例文(26)は「誰かが日本に行く」という前提がある場合に、その人だけでなく「私も日本に行く」という累加の意味を表している。ただし、文脈によっては日本に限らず「誰かがどこかに行く」という前提がある場合にも使える。いずれにせよ、何らかの範疇で同類の事態が生じることを表すのに「も」が使われる。このような「も」は「累加」の「も」である。一方、例文(27)では、例文(26)と違い、「両親」と「私」のどちらが前提ということはなく、両者を対等に取り立てて「も」が使用されている。しかし、「も」の持つ「累加」の意味が継承されているという点では、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文も「累加」の意味を表していると考えられる。

(26) 私も日本に行きます。(累加)

(27) 両親も私も日本に行きます。(累加)

次に「累加」の「も」が反復する場合の NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>の順序について見る。例文(28a)は例文(28b)のように「笛」と「旗」を置き換えることができる。しかし、例文(29a)は「千年」と「二千年」を置き換えると不自然な文になる。

(28)a. 四十人前後の参加があるけれど、私は笛も旗も持たない。大きな声で子どもをまとめる必要がないからである。

(吉田きみ子『絵に見る子どものサイン』)

b. 四十人前後の参加があるけれど、私は旗も笛も持たない。大きな声で子どもをま

とめる必要がないからである。

- (29) a. 千年も、二千年も前に、不意に戻ったような、美しく、古代的な風景！  
(清岡卓行『李杜の国で』)
- b. <sup>?</sup>二千年も、千年も前に、不意に戻ったような、美しく、古代的な風景！

つまり、例文(28a)は NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>に順序性がないが、例文(29a)はその配列に時系列的な順序が見られる。このような時系列的な順番は例文(30) (31)にも見られ、「<sup>?</sup>実行も計画も」「<sup>?</sup>育ちも生まれも」のように時系列と逆の順番にすると不自然な表現になる。このような順番は客観的に決まったものである。

- (30) この時も彼のあやふやな作戦は、真の困難が何かを理解せず、すべての好機を臆病に見送る等、その計画も実行もまことに気まぐれであった。

(ギボン(著)/朱牟田/夏雄(訳)『ローマ帝国衰亡史』)

- (31) 中橋は、大正十一年三月十四日生まれ。生まれも育ちも神戸である。

(栗林良光『大蔵省主税局』)

一方、世間一般に認められている順番や話し手にとっての重要性、人間の親疎関係などによる主観的な順番も見られる。例えば、例文(32)の「肉親愛」と「友情」は並立的であるが、相対的に重要な「肉親愛」が前に来ている。例文(33)では、「母」と「姉」のうち目上の「母」が前に来ている。このように、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文では相対的に重要だと思われる項目が NP<sub>1</sub>に配置される傾向がある。

- (32) 肉親愛も友情も、手のとどかない苦悩というものが、人生の行手には幾つでも落とし穴をつくってまちもうけている。

(瀬戸内寂聴『寂聴人は愛なしでは生きられない』)

- (33) それに応じて彼の感情も、一步大人に近づきつつあることを、母も姉も理屈ではわかっているながら、皮膚感覚でつかみきれずにいた。

(辻真先『四国殺人Vルート』)

ただし、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>は数量語と疑問語の場合はまた配置上異なる特徴を持っている。これ

については3.3で述べる。

## 3.2 「極限」と「ぼかし」の「も」の反復

### 3.2.1 「極限」の「も」の反復

取り立て助詞「も」が一つだけの例文(34)では、京都駅は普通なら夜も明るく、最も暗くなりにくいという前提がある場面で、その京都駅ですら暗かったことを表している。この場合の「も」は「他のところはもちろん、想定外の京都駅まで暗かった」という「極限」の意味となる。ここの「も」は同じく程度の高さを表す「でさえ」や極端的な列挙を表す「でも」に置き換えることができる。

(34) 灯火管制のため、(いつも明るい) 京都駅も 大変暗かったのを覚えている。(極限)

しかし、反復構文の例文(35)では、想定外の意味が弱く特に「いつもなら夜も明るい」などの文脈を付けないと、単に「京都駅」と「料亭」がともに暗かったという「累加」の意味にしかならない。「極限」の「も」の場合、通常なら考えにくい状況を際立たせるが、取り立てられる要素が増えるにつれ、その卓立性が減り、「累加」の「も」に回帰すると考えられる。

(35) 灯火管制のため、京都駅も料亭も 大変暗かったのを覚えている。(累加)

(上村松篁『春花秋鳥』)

以上のことから、「極限」の「も」は「NP<sub>1</sub>もNP<sub>2</sub>も」構文に継承されていないと考える<sup>4</sup>。それは「も」の数が多くなれば、通常なら考えにくい状況の累加になってしまい、「意外」の「も」の反復と「累加」の「も」の反復は意味的に異質性が存在しないためである。

### 3.2.2 「ぼかし」の「も」の反復

「ぼかし」の「も」は、「も」で取り立てることによって、他にも当該の事態に当てはまる主体がいるかのように表現することによって、当該の主体の卓立性をぼかして、曖昧で和らいだ表現にしたものである。

<sup>4</sup> NPが数量語と疑問語の場合は異なるが、これについては3.3で述べる。

日本語記述文法研究会(2009:138)は、「ぼかし」の「も」は大きく次の 3 つの場合に使用されると指摘している。

第 1 は、人やものごとの望ましくない性質について述べる場合である。

(36) 君も人が悪いね。(ぼかし)<sup>5</sup>

(日本語記述文法研究会 2009:138)

第 2 は、人やものごとの変化について、感慨を込めて述べるような場合である。

(37) 田中さんも老けたね。(ぼかし)

(日本語記述文法研究会 2009:139)

第 3 は、「も」を用いた文や節の後ろに、聞き手に働きかける表現を伴う場合である。

(38) 部長も怒っているみたいだから、早く謝った方がいいよ。(ぼかし)

(日本語記述文法研究会 2009:139)

しかし、例文(36)～(38)を「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文にした例文(39)～(41)は「ぼかし」の意味がなくなり、「累加」の意味しか残っていない。これは取り立てられる対象が増えると、当該の主体をぼかすより同類の他者がいることの方が際立つためであると考えられる。

(39) 君も彼も人が悪いね。(累加)

(40) 田中さんも柴垣さんも老けたね。(累加)

(41) 部長も課長も怒っているみたいだから、早く謝った方がいいよ。(累加)

例文(42a)は、ピアノ以外の楽しさも分かるという文脈では「累加」の意味になり、ピアノ以外の楽しさについては特に想定していない文脈では「ぼかし」の意味になる。この場合も、(42b)のように「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文にすると「累加」の意味にしかならない。

(42)a. 最近、ピアノの楽しさも分かるようになった。(累加、ぼかし)

b. 最近、ピアノの楽しさもバイオリンの楽しさも分かるようになった。(累加)

---

<sup>5</sup> 例文(36)～(38)の「(ぼかし)」は筆者(崔)が付したものである。

このような「ぼかし」の「も」は「宴もたけなわ」や「夜も更ける」のような慣用句にも使われる。この場合、時間の経過に対する話し手の感慨が感じられる。「宴」や「夜」の他に取り立てられるものはないため、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文にはならない。

以上のことから、「ぼかし」の「も」は「極限」の「も」と同じく、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文に継承されていないと考えられる。

### 3.3 数量語と疑問語に付く「も」の反復

数量語と疑問語に「も」を後接する文では、「も」が極限を表すものの、前接語によって些か異なる意味を持っているため、従来の研究では個別に扱われてきた。これに対して、本研究では先行研究で述べているように数量語に付く「も」は数の多寡を強調し、疑問語に付く「も」は全面的に否定する意味で、「累加」から派生した「極限」の意味を表すと考える。

#### 3.3.1 一般数量に付く「も」の反復

「数量語+も」が反復して使用される「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文は次の2つのパターンが挙げられる。

##### ①「一+量詞+も二+量詞+も」という形の慣用的な表現の場合

例文(43)(44)の「一目」「一味」などは数量語であるが、「一目を置く」「一味違う」という表現はあるが、「二目を置く」「二味違う」という表現はない。例文(43)で話し手が主張したいことは「弱者は強者にたいし一目を置く」ということであり、その「一目」を強く表現するために、「一目」の後に「二目」を入れるという手法を使ったものである。この場合、NP<sub>2</sub>は補助的なものである。例文(44)も同様である。

(43) 犬や猫の喧嘩でも、弱者は強者にたいし一目も二目もおき、けっして正面から頭をあげ得るものでない。

(相澤 淳『海軍の選択』)

(44) それでも一年先、二年先のあなたが、いまとは一味も二味も違ってきます。

(堀紘一『サラリーマンなんか今すぐやめなさい』)

②NP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>が連続した数量の場合

まずは述語が肯定の場合について見る。例文(45)では、普段なら手紙を二度も読まないが、今回は意外に二度読んだという意味である。この場合の「も」は「二度」という回数が多さを強調する「極限」の「も」となる。一方、例文(46)は手紙を「何回も」拝見したという意味になり、その範囲は「およそ二度か三度」であるという意味になる。同様に例文(47)は子供が寝つくまでに「長い時間」がかかるという時間の長さを強調した意味になり、その長さは「およそ1時間か2時間」であるという意味になる。これらの「も」はある程度の範囲を提示して、その甚だしさを表す「極限」の「も」である。

(45) そのお手紙は今日迄二度も出して拝見致し居り非常にうれしく面白く拝見致しました。

(46) そのお手紙は今日迄二度も三度も出して拝見致し居り非常にうれしく面白く拝見致しました。

(河上左京『河上肇獄中往復書簡集』)

(47) ウチの4ヶ月の息子は、寝つきが悪く、1時間も2時間も前からグズグズいっぱなしです。

(Yahoo!知恵袋)

次に述語が否定の場合について見る。寺村(1991)は例文(48)について、①「来なかった人の数が予想より(はるかに)多く50人に達した」という意味と②「それ(50人)ほど多くは来なかった、せいぜい30人か40人ぐらいだった」という2つの意味があると指摘している。

(48) 50人も来なかった。

(寺村 1991:78 の例文(169))

これを本研究の言葉で整理すると、前者(①)の「も」は「何人か来ないだろう」と予想していた場合に、実際には来ない人が予想以上に多くいたという意外の気持ちを表し、後者(②)の「も」は来場者が予想していた人数に達せず、何らかの最低ラインにも満たないという期待外れの気持ちを表しているということになる。また、前者の「も」は肯定文の「50人も来

た」でも「来るだろうと予想した人数以上の人 came」という意味になり、「来る人数/来ない人数」が期待値より大きいことを表すのに対し、後者の「も」は否定文にしか使えず、「50人」という数字が期待値の最低ラインを表すという違いがある。

このように述語が否定で数量語に付く「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文のうち、例文(49)は上の①の意味で使われている。例文(49)は食べられない日がおよそ一週間～十日という長い期間あったという意味を表し、その期間の長さを強調する表現となっている。

(49) 1週間も 10日間も食べられない時もあった。

(2021年7月25日閲覧)

<https://mevius.5ch.net/test/read.cgi/bookall/1582554688/955-n>

一方、例文(50)は上の②の意味で使われている。例文(50)は入室できる人数はおよそ50人～60人以下で、50人～60人というのは入室できる上限を少し超えた値を示している。

(50) 記念館の奥の土間は広いのですが、50人も 60人も入りません。

(2021年7月25日閲覧)

<https://www.city.azumino.nagano.jp/uploaded/attachment/25989.pdf>

例文(49)も例文(50)も同じ否定文であるが、例文(49)は食べない期間が1週間、10日間…と増えていくのに対し、例文(50)は入らないスペースが50人分、60人分…と増えて行くわけではない。前者は「1週間も10日間も食べ続けた」のように肯定文でも使え、「食べる日数/食べない日数」が期待値より大きいことを表すのに対し、後者は否定文にしか使えず、「50～60人」という数字は期待値の最低ラインを表すという違いがある。

### 3.3.2 最小単位の数量に付く「も」の反復

本研究でいう最小単位の数量(一+量詞)とは物事を数える際に1つの単位に当たる最も小さい数である。例文(51)は寺村(1991:83)が指摘しているように、最小単位の数量に付くと取り立て助詞「も」は述語が否定になり、「少なさ」を強調して全部否定の意味になる。

(51) 賛成する者は一人もいない。

(寺村 1991:83 の例文(192))

「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の場合、例文(52)のような同じ内容の反復や、例文(53)のような同一主体の異なる最小単位の反復は不可能である。

(52) \*りんごは 1 つも 1 つも 食べなかった。

(53) \*りんごは 1 切れも 1 つも 食べなかった。

ただし、例文(54)(55)のように、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>が異なる主体の最小単位である場合は「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文が可能である。例文(54)は雑炊のスープとご飯粒が全く残っていないという意味で、例文(55)は護衛とオートバイが全く付き添っていないという意味である。いずれも単独の「も」と同じく、全部否定の意味となる。

(54) 時を忘れて雑炊を食べ終えたとき、ふと鍋をのぞくと、1滴のスープも1粒のご飯粒も残っていなかった。

(食彩浪漫(NHKテレビ放送テキスト))

(55) 浩宮が何度か訪れたリヒテンシュタインでは、八十歳の国王が王妃を隣に乘せ、自らハンドルをとり、一人の護衛も一台のオートバイもなく外出していた。

(河原敏明『美智子皇后』)

### 3.3.3 「疑問語＋量詞」に付く「も」の反復

「疑問語＋量詞」というのは、「いくつ」「何回」「何人」「何年」「何本」「何キロ」のような表現のことである。このような表現に「も」を後接する場合、後に肯定文が来る場合と否定文が来る場合で意味が異なる。例文(56a)と(57a)は述語が肯定の場合で、発音を練習した回数、ネクタイを作った数が多いことを表す。一方、例文(56b)は述語が否定の場合で、発音を練習したことがあるが、回数はそれほど多くないことを表す。例文(57b)も同じくネクタイを作ったことは作ったが、数がそれほど多くないことを表す。このように「疑問語＋量詞＋も＋肯定述語」は当該の(不定の)数量が多いことを表し、「疑問語＋量詞＋も＋否定述語」は当該の(不定の)数量が少ないことを表す。



- (56)a. 私は日本語の発音を何回も練習した。  
b. 私は日本語の発音を何回も練習していない。  
(57)a. 私はネクタイを何本も作った。  
b. 私はネクタイを何本も作っていない。

一方、この「NP も」を反復した「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文は例文(58)、(59)のように肯定文では使うが、否定文には使われない。肯定文の場合は、その行為を繰り返し多数行ったことを表す。否定文に使われないのは事態を繰り返すことと事態の否定を表すことが意味的に合わないためであると考えられる。

- (58)a. 私は日本語の発音を何回も何回も練習した。  
b. \*私は日本語の発音を何回も何回も練習していない。  
(59)a. 私はネクタイを何本も何本も作った。  
b. \*私はネクタイを何本も何本も作っていない。

また、例文(59)の「作った/作っていない」を「持っている/持っていない」に変えると例文(60)のように肯定も否定も非文となる。このことから、同じ「疑問語+量詞」を反復する場合、反復的事態には使えるが、所有のような一回的事態には使えないと考えられる。

- (60)a. \*私はネクタイを何本も何本も持っている。  
b. \*私はネクタイを何本も何本も持っていない。

また、反復的事態の場合、例文(61)、(62)のように NP<sub>2</sub>が NP<sub>1</sub>より桁数が多い数字で繰り返す場合もある。この場合、肯定文ではその頻度が非常に多いことを表し、否定文ではその頻度が期待されたほど多くないことを表す。

- (61)a. 日本語の発音を何百回も何千回も練習した。  
b. 日本語の発音は何百回も何千回も練習していない。  
(62)a. 私はネクタイを何十本も何百本も作った。  
b. 私はネクタイを何十本も何百本も作っていない。

### 3.3.4 疑問語に付く「も」

疑問語というのは「いつ」「どこ」「だれ」「なに」のようないわゆる疑問詞のことである。NP が疑問語の「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文は「どこもどこも」「誰も誰も」のような「同一疑問語+も」が反復する表現はあるが、異なる疑問語の反復は「\*どこも誰も」のように使われない。「どこもどこも」や「誰も誰も」は「どこも」や「誰も」を繰り返して強調した表現であるが、反復構文というほど熟したものではない。一方、「誰もかれも」や「どこもかしこも」は「誰も」や「どこも」を強調した表現で、固定した慣用表現となっている。

一方、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」の NP<sub>2</sub>に疑問語が来るものは、「ない」や「忘れる」など事態の非存在や消失や否定を表す述語となる傾向が見られ、NP<sub>1</sub>を代表とする集合に属するものが全て存在しなかったり消失したりすることを表す。例文(63)は表面的には「障害はもちろん、他のマイナス要素もない」ということを強調した表現である。例文(64)は「仕事をはじめ忘れるべきことを全て忘れる」という意味を表す。いずれの場合も、「何も」は強調のために付いているだけで、特に障害以外の何かや仕事以外の何かを想定していない場合もある。

(63) ところがこの間、障害も何もないふつうの奥さんが、「うそ。あなた、自分でワイシャツにアイロンかけるの？(中略)」ですって。

(田原米子『ひかり求めて』)

(64) 仕事も何も忘れて旅に出る。

## 4. まとめ

以上のように本研究では取り立て助詞「も」が反復して使用される「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文について考察した。まず、取り立て助詞「も」には「累加」「極限」「ぼかし」の意味があることを示し、その反復が可能かどうかを議論した。その結果、「累加」の「も」は反復構文でもそのまま「累加」の意味が受け継がれるが、「極限」と「ぼかし」の「も」はその意味が弱まり、「累加」の「も」

に回帰することを指摘した。また、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文における NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>の順序性について考察し、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>は順序性がある場合とない場合があり、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>との間に時系列的に「前―後」の関係や、重要度に「大―小」の関係がある場合は、この順番に NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>が並ぶことを指摘した。

次に数量語と疑問語に付く「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文について考察し、次の特徴があることを指摘した。

・NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>が数量語の場合

- ① 「一＋量詞も 二＋量詞も」(慣用表現)の場合:「NP<sub>2</sub>も」は単独では使われず、「NP<sub>1</sub>も」を強めて言う働きがある。(例「一目も二目も(置く)」)
- ② NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>が連続した数量の場合:
  - a. 述語が肯定の場合:ある程度の範囲を提示して、その甚だしさを表す。(「1時間も2時間も(前から並ぶ)」)
  - b. 述語が否定の場合:
    - ・予想を越えた極限の範囲を表す。(「1週間も10日間も(食べない)」)
    - ・期待値に達していない範囲を表す。(「50人も60人も(入らない)」)
- ③ 「一＋量詞＋も」が反復する場合:NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>は異なる主体で、述語が否定になり、全部否定の意味となる。(「1滴も1粒も(残っていない)」)
- ④ 「疑問語＋量詞＋も」の場合:
  - a. 同一の「疑問語＋量詞＋も」が反復する場合:

述語が肯定となり、数の多いことを強調する。また、反復的事態には使えるが、一回的事態には使えない。(例「何回も何回も(練習した)」)
  - b. 異なる「疑問語＋量詞＋も」が反復する場合:
    - ・述語が肯定の場合:数の多いことを強調する。(「何百回も何千回も(練習した)」)
    - ・述語が否定の場合:数が期待されたほど多くはないことを表す。「何百回も何千回

も(練習していない)」)

・NP<sub>1</sub>または NP<sub>2</sub>が疑問語の場合:

- ① 「同一疑問語+も」が反復する場合: 否定文に使われ、その「疑問語+も」を強調する。  
(「誰も誰も」)
- ② NP<sub>2</sub>が疑問語の場合: 事態の非存在や消失や否定を表す文に使われ、NP<sub>1</sub>を代表とする集合に属するものが全てそうであることを表す。(「障害も何も(ない)」)

今後は上の結果を受けて、「NP<sub>1</sub>でも NP<sub>2</sub>でも」構文や「NP<sub>1</sub>でも NP<sub>2</sub>でも」構文についても考察する予定である。

#### [参考文献]

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』. スリーエーネットワーク.

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』. くろしお出版.

中俣尚己(2015)『日本語並列表現の体系』. ひつじ書房.

日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法 5 第 9 部 とりたて 第 10 部 主題』. くろしお出版.

沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』. ひつじ書房.

#### [利用したコーパス]

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(通常版、中納言)(BCCWJ)